

臨濟錄の舊訓批判

— 臨濟錄札記抄(二) —

篠原壽雄

黄檗云。作麼生得這漢來。待痛與一頓。師云。說什麼待來。即今便喫。隨後便掌。112・9
この一條の商量は從來次のやうに讀まれてゐる。

黄檗云く。作麼生か這の漢の來ることを得ん。待つて痛く一頓を與へん。師云く。什麼の來るを待つとか説か
ん。即今便ち喫せよといつて、後に隨つて便ち掌す。

さらに、この古訓に従つて『臨濟錄講話』では次のやうに語つてゐる。

怪しからん大愚！憎いやつぢや、若し大愚が此處へ來たならば、三十棒喰はしてやらねばならん。何！何の來る
のを待つには當らんこつちや。即今喰はしてやらうと、言ひも果てずに、臨濟は黄檗をばつと打つた。

いま、この舊解に對して批判をこころみるに先だつて、先づ文章の構成面を檢討してみよう。

第一に、黄檗がいふ「作麼生得這漢來、待痛與一頓」に於て、「作麼生」といふのは、「怎生」などと同様に、元
來、疑問詞であり、文語でこれを言へば「如何」といふことばであるが、ここの商量では「得」を豫想し、又これを
成立させたい期待をもつて問ふのである。下句「待痛與一頓」も、上句の「得」を可能にせんとする期待が成立して
始めて言ひ得るのである。従つて、この「作麼生」は上句のみでなく、下句にもかかり「與」を可能にせんとする黄
檗の語氣を示すものである。

つまり、この兩句は共に「得」「與」といふことを可能にしたい意志・願望の意をもつてゐるのである。

次に「說什麼待來」の「說什麼」は、

這還有甚麼不同呢。これが何の違ふところがあるかい。

といふ現代中國語の反問の用法と同じく、相手からの答を期待することなく反問する場合である。先きの黄檗のことはの考察に於て明白である如く、臨濟は黄檗が大愚のやつてくるのを期待していふことを、そのまま承けて反問しそこに自己を主張してゐるのである。

このやうな文例は本録にもほかに見られる。

黄檗云。何不道。來日更喫一頓。師云。說什麼來日。即今便喫。道了便掌。94・5

この兩者を對比してみれば、右の文例で「何不道」といふ文首の疑問のことは、ここで問題としてゐる一條でもやはり疑問の意味のことは「作麼生」をもつて言ひ出してゐる。これに對して兩者は共に「說什麼」といふ強い反問で答へてゐる。次に、黄檗が「來日更喫一頓」といつたのに答へて、臨濟はその「來日」といふ一語をそのまま引き取つて「說什麼來日」と打ち返してゐるのである。いま、この黄檗のことはに對しても、臨濟はその「待」といふ一語をひつたくつて、そのまま「說什麼待來」とたたみかけたのである。

斯く兩者を對比してみると、同じ商量の方法が展開されてゐることを知るのである。従つて、右の文例で同じ意味をもつて二度「來日」が用ひられてゐるやうに、この二つの「待」も同じ意味をもち、しかも、この「待」は上下の句の關係から、黄檗の期待する「這漢の來るを得て」といふ可能性が實現されて始めて「一頓を與へよう」といふ意味を示す。即ち、「待」は可能性を實現しようといふ謂になるのである。かく、「待」はこの「與」を可能にしやうといふ意志・希望の意味に讀まねばならぬことがわかる。

しかしながら、この「待」を先人の如く動詞として讀むことは本録にその例を見ない。本録中に於て「待痛與一

頓」と似てゐる文例は

待伊打汝。接住捧送一送。看他作麼生。102・2

のみである。しかし、これを仔細に看れば、この「待」は従句「伊打汝」を主句「接住捧送一送」に接続せしめるはたらきをなすいはば下句を成立させるための條件をなし、「……したら」或は「……した時には」などと讀むべき従屬接続詞である。

翻つて、この「待痛與一頓」に於ては、上述の如く「待」は動詞「與」の意味を助けて、それを可能にしようとする意志・希望の意を有するものである。同じく「待」を句首に冠してゐる點は似てゐるが、彼の場合の従屬接続詞としての用法とは異なるものである。つまり、これら二つの「待」の機能は全く別である。

次に再び「說什麼待來」について考察を進めてみよう。これと文形の似てゐる用例には、次の如きものがある。

佛法說什麼麤細。96・10

說什麼法。40・7

求什麼物。54・9

覓什麼汁。76・4

有什麼了期。112・9

これらの例を見れば「說」「求」「覓」などの他動詞を冠した「什麼」は、その動詞の目的語として「麤細」「法」「物」「汁」などの名詞をその下に伴ふのが通例である。したがつて、目的語として讀むのに相應しい語順にあるこの「待」を待つと他動詞として讀むことには慎重でなければならぬ。

もし、從來の舊訓のやうに二つの「待」が他動詞であれば、この語の次に目的語を伴ふのが語法的にはより正しい文形である。即ち、「作麼生得這漢來」に於ては、「這漢」を「得る」のではなく、「這漢來」を「得る」のであるか

ら、もし舊訓に従ふならば、「待痛與一頓」は

待他來痛與一頓。

といふ文形にならねばならず、又「說什麼待來」も、その文形は

說什麼待他來。

とならねばならぬ。

右の考察からも分るやうに、語法上から検討して「待」を動詞として讀むことは成立し得ないのである。

では、この「待」は果して如何に讀むべきか。先きの「待」についての検討を更に進めれば、この「待」の如くにある動作——ここでは「與」——をなさんとする意志・希望をあらはすやうな、いはば、文語で言へば「欲」をもつてあらはすやうな場合は、本録に於ては「要」を用ひるのが通例である。

大衆要會臨濟賓主句。問取堂中二首座。28・5

切要求真正見解。40・1

你要知麼。108・5

などが、本録に習見する例であり、これらの「要」は現代中國語で、

你要買甚麼。あなたは何をお買ひですか。

我有一件要和你商量的事。私はひとつ貴方に御相談したいことがあります。

大概明天他要來的。多分彼は明日來るだらう。

といふ場合の「要」と全く同様であつて、これを他の動詞に添へると、その動作をすることを求める、要求するの意となり、結局「……したい」「……しようとする」といふ意志・希望を表はす助動詞である。又、時には意志に關係

なく、ある事態が生起・實現しようとしてゐる意を表示する場合もこの「要」による。

再びこの立場に立つて、現代中國語の「待」の考察をなして、より正しく「待」を理解することにしよう。「待」は現代中國語に於ては、

方今百政待興。只今は萬般の政治が興らうとしてゐる。

現在竟待死了。今は全く死にさうだ。

といふやうに用ひられてゐる。この場合の「待」は意志や願望を意味する語であり、この意味は上述の「要」と全く同様である。又「待」が「待要」と二字に延びて用ひられることがある。

你們待要回去麼。君達はもうじき歸られるのですか。

このことよりしても、上記の説明は一層明白になる。即ち、外ならぬこの助動詞としての性格こそ、「與」を補助してその述説力を補つて、その句の意味を完全にするための「待」が持たねばならぬ條件を満し得るものである。斯くして、この「待」は「要」と同様に讀まねばならぬことが明白になつた。

いま、かく「待」の助動詞としての性格を考察したが、先きの「説什麼待來」の論證では、「説什麼」の次には名詞が位し、又それが目的語であることを述べた。斯様に「待」一語が別な機能をもつといふことは、一見矛盾するのではないかとの疑問が豫想される。この點を重ねて明白にしなければならぬ。

臨濟が黄檗からひつたくつていふ「待」は彼の「待痛與一頓」をそのままうけた語氣をもつものである。これを句法の上から言へば、「什麼」は「待」を修飾する形容詞であるから、従つてこの「待」は名詞としての性格を荷ふわけである。——「來」字については後述——

しかしして、「説」は他動詞であるから、その動詞の目的となる事物をあらはす語が必要である。この「説」の内容を示す目的語が外ならぬこの「待」である。斯様に、「待痛與一頓」に於ける「待」の助動詞としての性格は、「説

「什麼待來」に於ては名詞となり、又目的語としての性格を有するわけであつて、同一語と雖も用ひられるところによつて、その機能を異にするのは敢へて怪しむに足りぬことである。

次に再び舊訓を批判すれば、「說什麼待來」の「來」を舊訓はすべて「來る」と動詞として讀んでゐる。これまた大いに誤つてゐる。もし、舊訓の如く「來」を動詞の意味に讀むためには、このままの文形を以てしては、かかる意を示すことは不可能である。(舊訓では「來」を動詞として讀むと同時に、「待」も「待つ」と他動詞に讀む。しかし「待」を他動詞として讀むことが不可能なことは既に述べた。)

即ち、「待」の主格は黄檗であり、「來」の主格は「這漢」ト大愚である。この主格を異にする二語をそのまま直接結びつけることは出来ない。その場合は、「來」の主格「這漢」を三人稱代名詞「他」を以て補ふのがより正しい語法である。従つて、

說什麼待他來。

とならなければ、舊訓を成立せしめ得ないのである。原文のままでは「來」を動詞として讀み得ないことは明かである。かく、この場の「來」を理解して、本録に於ける「來」の用法を考察してみよう。

與我過蒲團來。106・8

侍者點茶來。124・5

睡來合眼。88・12

などは、何れも「來」が句末か或は動詞の下について語助となつてゐる例である。

かやうにみると、「說什麼待來」に於ても「來」は句末の助字であつて、いはゆる句終詞としての性格をもち、その字自體の意味はないのである。したがつて、もし訓讀するなら「什麼の待を説かんや」と讀むべきであり、舊訓のやうな實辭としての「來」の意味は存在しないのである。

この「來」が助字として用ひられることについては、既に先人が説いてゐる。即ち、劉洪の『助字辨略』卷一に來語助辭。莊子人間世。雖然。若必有以也。嘗以語我來。李義山詩。一樹濃姿獨看來。

といつてゐるのは正しくこの例で、前者は「來」が「語」につき、後者は「看」について、その語助として用ひられてゐるのである。このやうに「來」の助字的な用法は禪籍に限らず、唐詩や、その他の典籍にも習見してゐるのである。

それでは「作麼生得這漢來」の「來」も、やはり上記の如き語助として讀むべきであるか否かも一應吟味しなければならぬ。この場合、もし「來」を助字として讀んだならば「得這漢」といふことが成立しなければならなくなる。では「得這漢」とはいかなることか、先づ「得」の性格から考察してみよう。

「得」は『説文』に「行有所得也」とあるのは、ある行爲によつて取得する結果を見たことを意味するものである。『左傳』に「凡獲器用曰得。得用焉曰獲。」(定公九年)と言ひ、このことばに對する疏の解釋は、人間生活に役立つ器物を取得したのを「得」と言ひ、そのやうな器物によつて、ものを獲得するのを「獲」といふ——たとへば、戰爭によつて捕虜を獲得したり、田獵によつて麟をとらへたりするやうに——といふ説明を與へてゐる。即ち、「得」は一般にある行爲の結果の獲得を意味したであらうが、その最初はもつぱら具體物の獲得を意味したであらうことは、「器用を獲るを得といふ」と言ふ説明にもうかがはれる。(内田道夫氏「中世中國語における「得」の特質について」東北大學文學部研究年報第二號)かく「得」について考察してみると、上述の「這漢を得る」といふ表現は、『左傳』の解釋に見られる如き非常に古い用法である。斯様に古い文語體の文章にこそふさはしい表現が、本録の如く多分に口語をまじへた文體に於て用ひられることは極めて不自然である。

したがつて、この場合は「來」を「這漢の來る」ことを可能にする動詞として讀まなければならぬ。「說什麼待來」の「來」が助字である場合と混同してはならない。

以上の語法的検討に於て、二つの「待」は「要」と同じ意味に讀まねばならず、又「說什麼待來」の「來」は助字として讀むべきことを考察した。

かく語法的な理解の下に、この商量の場を檢討し直してみなければならぬ。

黄檗に參ずること既に三年、首座には如法の大器と期待されながら、いまだ師の活作略によつても道眼の明らかとならない彼は、悄然として黄檗の會下を去り行き、その命のままに高安灘頭の大愚を訪ねた。彼は新たな師と相見し訊ねられるままに前事を餘すことなく具陳した。聞くなり、大愚は頭から呶鳴りつけた。

黄檗がそんなに心切に徹底してお前を鍛へてくれるのに、なんで今さらこんなところまでふらついて來て、過があるのですかなどと訊ねるのか。

この一語をきくなり、臨濟は眞個の自己を見出した。それは道を求めに求めてきた彼の心根に響く痛烈な一語であつた。かくして、彼の眼前には廣大無邊な世界が開けたのである。

かく、大愚の下に大悟して、再び黄檗の大慈に甘えてその會下に戻つた彼をつかまへて商量は續けられる。

臨濟から大愚との問答をきくや、黄檗は大愚の饒舌を打して、なんとかしてあの饒舌漢が來たら、こつびどい一棒をくらはさう、といふ。

しかし、體驗につむに體驗を以てした臨濟は、より大きく禪者として脱皮し得た眞人臨濟であつた。すかさず、彼が黄檗に切り返したことは、彼がやつて來たらひどいめにあはせてやらうと、たつたいまやるのではなく、何れその機會が到來したらやらうといふ黄檗に痛棒を與へるものである。即ち、臨濟は黄檗の只今の一大事としないうところを鋭くきり返して打してゐるのである。

その彼の打し方は、舊解の「何だつて、來るのを待つなんていふ」と異なり、そこにはいささかも惰氣が感ぜられないのである。即ち、舊解に於ては黄檗は「這漢の來る」といふことを念頭において言つてゐるが、身心脱落した只

今の臨濟にとつては、最早や這漢の來るとか來ないとかいふことは既に問題にならない。彼が鋭くきり返したことは中には「來る」なんてことは一言半句も言つてゐないのである。臨濟は黄檗の打し方をこそ問題としてゐるのであり、それが只今のものとして體驗され得るか否かといふことのみが大事とならなければならぬとする立場である。

既に、もともと黄檗の佛法なんて多子なしちやと言ひ放つた一語には、天下を睥睨する豪放な氣宇と、たくましい生命の躍動力が感ぜられるのである。しかしそこにはひたぶるに自己をみつめ一步一步脚下を照顧しつつ、確實に自己を鍛へあげていく臨濟がある。この商量に於ても、その慈師に對してすら一步も譲らず、毅然として自己を主張して止まない。しかもその主張は、彼の自内證たる體驗の露呈そのものである。

又、黄檗が大愚を打すといふことを大事としてゐるのに對して、臨濟は既にその念頭に大愚なく、ただあるのは目前聽法歴々底の自己とこれに對す黄檗のみであり、間髪を容れ得ぬこの商量の應酬は、その弾力性に富んだ語調と共に、彼の鍊りに鍊つた體驗を雄辯に物語るのである。

兩虎の商量の眞骨髄はかく解してこそ、その間に流れる即時即應底の妙用も看取され、偉大なる真人臨濟の片影に一步近づき得るものと信ずるのである。舊訓をもつてしては、那邊の消息は斷じて窺ひ得ないのである。

(附記) 本文下の數字は岩波文庫本臨濟錄の頁數、行數を示す。

なほ本稿を成す際の、京大人文科學研究所に於ける、入矢先生の錦密な御指導と、平岡先生の不斷の御忠言に對して、重ねて謝意を表す。(一九五二・七・五)